

設立30周年記念

# 研究紀要

## 第25号

事業団の沿革

30年のあゆみ

縞条体圧痕文の付く野島式土器

金子直行

—早期後葉における縞条体圧痕文の付く細隆起線文土器の関係性について—

縄文前期中葉から後葉土器群の系統関係とその意味

細田勝

加曾利E式土器の終焉と称名寺式土器の関係

上野真由美

土偶研究とジェンダー考古学（1）

小野美代子

荒川流域出土の大席式土器について

栗岡潤

関東地方における古墳時代前期の木器と低地遺跡

福田聖

旧埼玉県立博物館収蔵品の鉄刀と刀装具について

瀧瀬芳之

—埼玉県内出土象嵌遺物の研究（その2）—

国界地域の土器流通

赤熊浩一

—下総国と武藏国の様相—

地震で沈んだ倉と古代の集落

田中広明

2011

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1 白井沼遺跡出土大麻式土器



2 大型壺口縁部（白井沼）



3 複合口縁壺（白井沼）



4 鋼冶屋・新田口遺跡（非掲載）



5 大型壺口縁部（川合遺跡）



6 大型壺口縁部（川合遺跡）



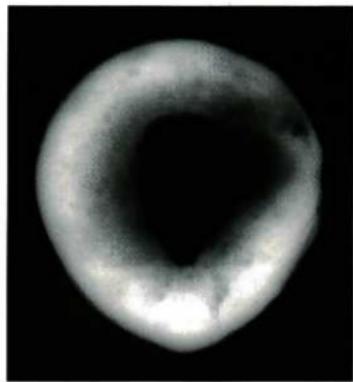
7 大型壺口縁部（川合遺跡）



8 大型壺口縁部（川合遺跡）

## 口絵2

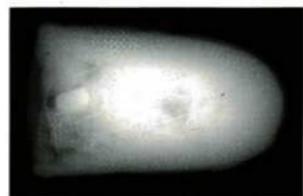
瀧瀨論文 X線透過写真



SPM88-041-12



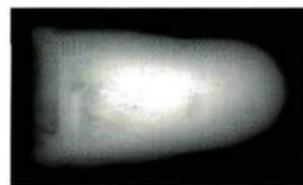
SPM88-041-16



SPM88-041-63



SPM88-041-64



# 荒川流域出土の大麻式土器について

栗岡 潤

**要旨** 古墳時代前期、富士山を望む駿河湾沿岸地域では、「大麻式土器」が盛行する。この『大麻式』には、他に類を見ない特異な器種である大型壺と、大型甕を含んでいる。大型壺は、その特徴的な胎土、器形から、他地域においては破片資料でも存在を認識でき、隣接する神奈川、山梨、西は大阪・奈良、三重、東は茨城・栃木まで分布が確認されている。また、大型甕は、主に太平洋沿岸地域に分布し、福島県までその存在が知られている。

埼玉県・東京都の荒川・利根川流域では、これまで、大麻式土器の出土遺跡については散見される程度で、他の外来系土器に比べ、その出土量の少なさから注目されてこなかった。また、その特異な器形から、大型壺のみが注目され、報告されてきたこともあって、大麻式=大型壺という認識が定着している。しかし、近年埼玉県内の古墳時代前期の低地遺跡が相次いで調査され、搬入品、模倣品を含め類例が増加しつつある。今回、その分布を調査したところ、21遺跡確認でき、必ずしも大型壺のみではなく、他の器種も同時に出土し、また、出土遺構も竪穴住居等の居住域からの出土が多いこともわかつてきただ。

## 1 はじめに

弥生時代終末～古墳時代前期の関東地方では、東海西部、畿内、北陸などを中心とした地方からの「もの」と人の動きによって、弥生社会に大きな変革をもたらした。埼玉県を流れる、荒川と利根川流域においても同様の変化をたどり、古墳時代へと移行していく。

こうした「もの」と人の動きの中に、顯著ではないが、駿河湾沿岸地域から関東地方への動きが認められる。いわゆる大麻式土器の移動である。

大麻式土器は、とくに大型壺の移動が顕著で、神奈川県、山梨県を中心に西は大阪・奈良、三重、東は茨城、栃木まで分布が認められている。その多くは、大型壺が単体で動く例が報告されていた。

近年、筆者は、埼玉県比企郡川島町に所在する白井沼遺跡を調査する機会を得た。白井沼遺跡は、荒川とその支流が形成したと考えられる自然堤防上の遺跡で、古墳時代前期の周溝遺構(註1)、掘立柱建物跡、溝跡、井戸跡、土壙等で構成される集落遺跡で、これまで一般的とされた竪穴住居跡

で構成される集落とは様相の異なる遺跡であった。

遺跡からは、多量の在地産の土器とともに、東海地方西部系を中心とした外来系土器が出土した。この外来系土器の中に、大麻式土器を二十数点抽出することができた。大麻式土器は、大型壺、複合口縁(折り返し口縁)壺、大型甕、高杯、小型鉢など、複数の器種が認められた。大型甕以外は、全て同じ胎土で製作され、石英とともに、白色の軽石状粒子を多量に含んでいたことから、搬入品と判断した。

他の外来系土器が全て在地の粘土で製作されているのに対し、複数器種、個体とも同じ胎土で製作されていたことは、注目される。

これまで関東地方での大麻式土器の分布状況は、複数器種、複数個体が出土する例はなく、白井沼遺跡の例は、大型壺のみが単体で移動するという認識を改めさせるのに十分な資料である。

調査報告書(栗岡2007)で大麻式土器の分布について簡単に報告したが、その後資料調査を重ねるなかで、新たに出土例を確認することができた。

今回は、埼玉県、東京都を流れる荒川、利根川流域における分布の傾向と、出土遺構等を中心に明らかにしていく。

## 2 大廟式土器について

「大廟式」とは、静岡県東部の東駿河、伊豆地方に設定された古墳時代前期の土器型式である。大廟式については、渡井英善の研究に詳しい（渡井1998、1999）ため、ここでは詳細は触れない。

しかし、大廟式の一部の器種が、埼玉県を含む関東地方にまで広く分布していることから、ここでは、それらの特徴を概観する。

現在、関東地方等で確認される大廟式土器の出土器種は、大型壺（第2図1・2）、複合口縁壺（同3～6）、大型甕（第3図7～10）がある。

以下、各器種について特徴を述べる。

### （1）大型壺（第2図）

大型壺は、口径30cm～40cm、器高60cm～70cmとなり、大廟式の代名詞ともなっているもので、大廟式＝大型壺という認識が一人歩きしてしまう傾向はある。

大型壺の最大の特徴は、口縁部の形状と胎土にある。口縁部は、内面端部に突帯を有することを最大の特徴としており、他地域の壺には無い特徴であるため、認識されやすい。

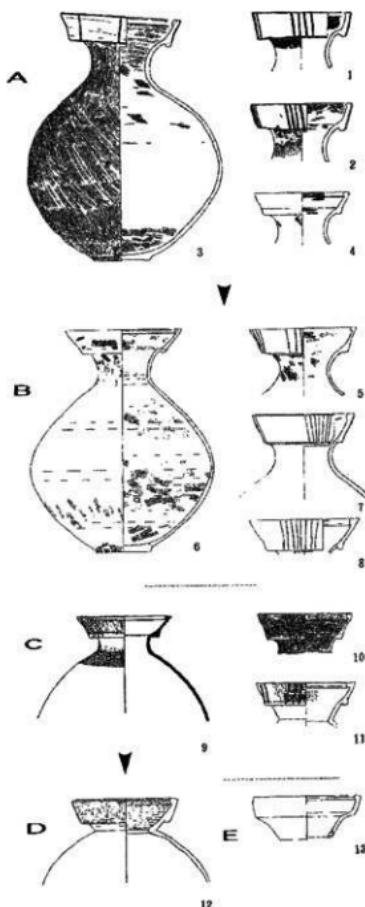
また、胎土には白色の軽石状の粒子を含み、色調が淡黄白色や淡橙白色であるなど特徴的で、他地域で出土すると、容易に判別できるものが多い。

大型壺は、渡井によって形式変化が論じられている（渡井1999・第1図）。それによれば、大型壺は、弥生時代から続く複合口縁（折り返し口縁）壺を基にするものと、口縁部に段を有する二重口縁を意識して製作されたものと2系統あるという。

古い段階（第2図1）のものは、まず折り返し口縁部を作り、その上に概ね垂直に立ちあがる口縁部を乗せ、内面に突帯を巡らせる。突帯は断面が

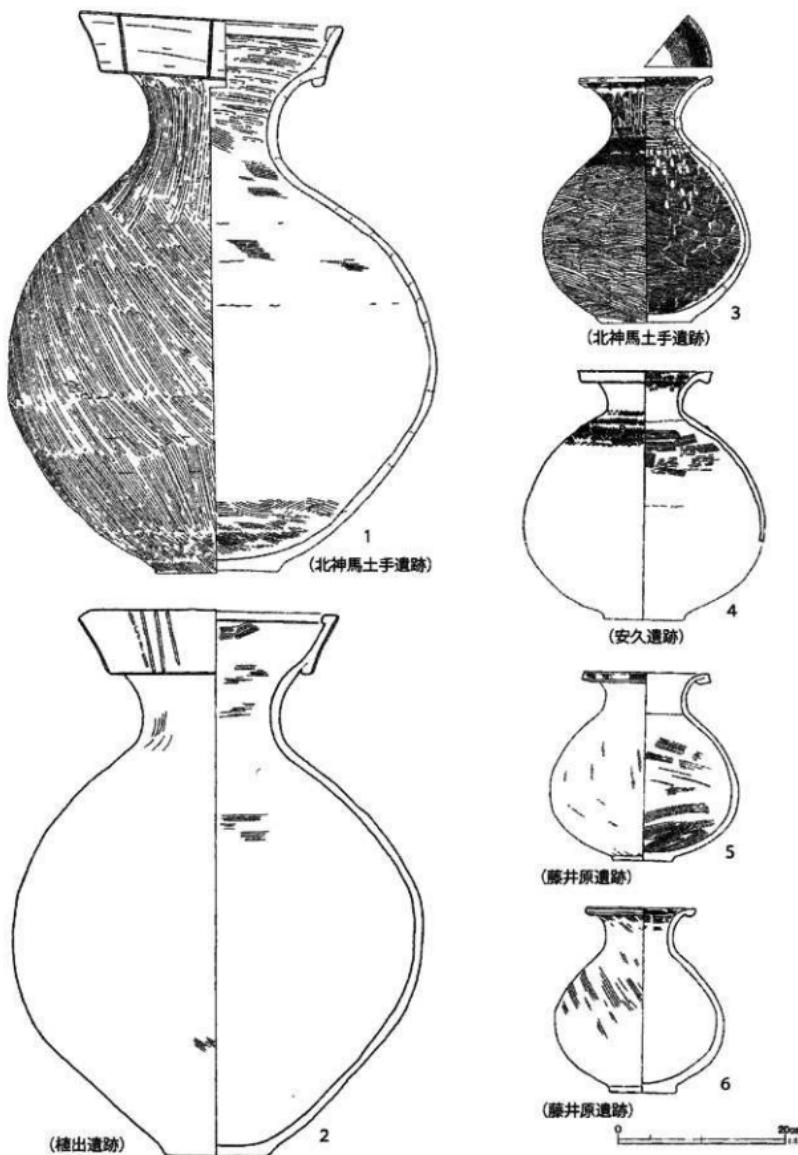
鋭利な三角形となり、口縁部も短い。（A・B類）

新しい段階（第2図2）のものは、単純口縁の口縁部～頸部外側に、断面三角形の粘土帯を貼付し、二重口縁とするもので、口縁部内面に、突帯が巡るが、断面の形状が、突出の大きな四角形となり、口縁部も高くなる。（C類）

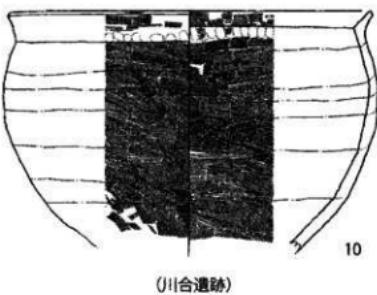
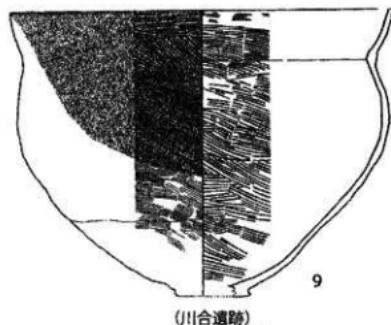
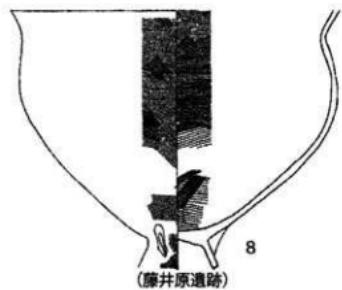
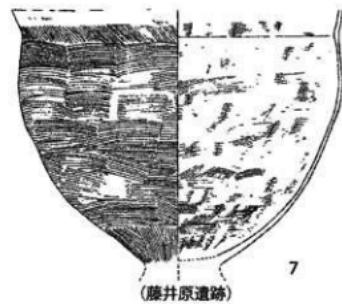


（渡井1999より転載）

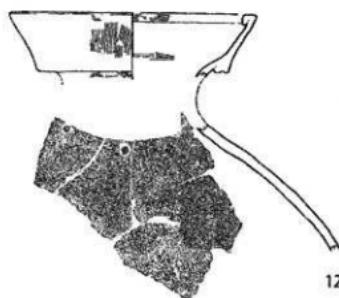
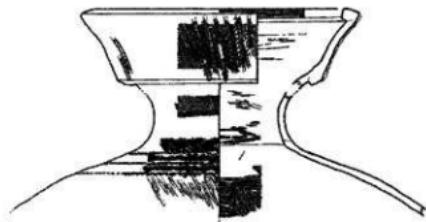
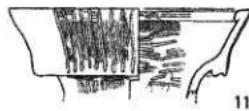
第1図 大型壺の分類



第2図 駿河・伊豆の土器（1）



<参考>



11～13 胎土比較参考資料  
(川合遺跡)



第3図 駿河・伊豆の土器（2）

また、新段階では、頸部がくの字状に屈曲するものが出現する。(D類)

これらは、A類～D類と変化し、概ね大廟Ⅰ式～IV式に対応する。

## (2) 複合口縁壺 (第2図3～6)

複合口縁壺は、口径が20cm以下、器高20～30cm前後の中型の壺で、頸部からラッパ状に大きく開く口縁部を有し、概ね水平に開いた口縁端部に、粘土帯を貼付または折り返す、所謂「折り返し口縁壺」と呼ばれる。

肩部に文様帶があるものと、無文のものがある。関東地方で出土するこの種の壺は、大型壺と同じ胎土、類似した文様構成であるため、識別しやすい。その分布は、主として神奈川県西部に集中するが、大型壺と比べると、その分布範囲は狭い。これまでに、埼玉県においては、全く認識されていなかった器種である。

## (3) 大型壺 (第3図7～10)

大型壺は、口径40cm前後となる大口径の壺で、口縁部または胴部上部が最大径となる。頸部の屈曲は弱く、短く外傾するものが多い。底部は平底のものと、台付となるものがある。第3図8のように台付となり、脚台部と胴部との接合部分に補強のためと思われる粘土が貼付されるものもある。胴部の調整は内外面とも粗いハケ目が施される。

胎土は、大型壺や複合口縁壺とは異なり、堅緻だが、大粒の石英等の砂粒を多量に含んでいる。白色軽石状物質を含むものの、大型壺ほど顕著ではない。

大型壺は、これまで太平洋沿岸地域に分布していることが確認されていた。内陸部である埼玉県では、類例は全く見いだせなかつたものである。以上、各地で出土する大廟式土器の、大型壺、複合口縁壺、大型壺の特徴について簡単に述べた。次項では、埼玉県を中心とした荒川、利根川流域の大廟式土器の詳細について述べる。

## 3 大廟式土器の分布と出土土器について

埼玉県、東京都の荒川、利根川流域では、大廟式土器の出土遺跡は、搬入品、模倣品を含め21遺跡確認できた。(第4図・表1)

特に大型壺は、特徴的な器形、胎土であるにも関わらず、S字彫等の他の外来系土器に比べると、出土遺跡は極めて少ない。

本項では、大廟式土器出土遺跡の分布を明らかにし、各遺跡の出土器種と出土遺構について明らかにしていく。

以下、埼玉県を中心とした、荒川と利根川流域の大廟式土器の出土遺跡について述べる。

遺跡の各番号は、第4図の分布図の番号と同じである。

### 1 上小岩遺跡 (第5図1) (上小岩1990)

上小岩遺跡は、東京都江戸川区北小岩に所在する。遺跡は、江戸川右岸の、下総台地から低地に移行する自然堤防上に立地する。

遺物は、大型壺口縁部が1点認められる。小破片であるため、全体の器形は復元できない。口縁部外面に、棒状浮文が認められる。

遺構外から出土した。

### 2 舎人遺跡 (第5図2) (永峯他2006)

舎人遺跡は、足立区舎人に所在する。毛長川流域の自然堤防上に立地する。

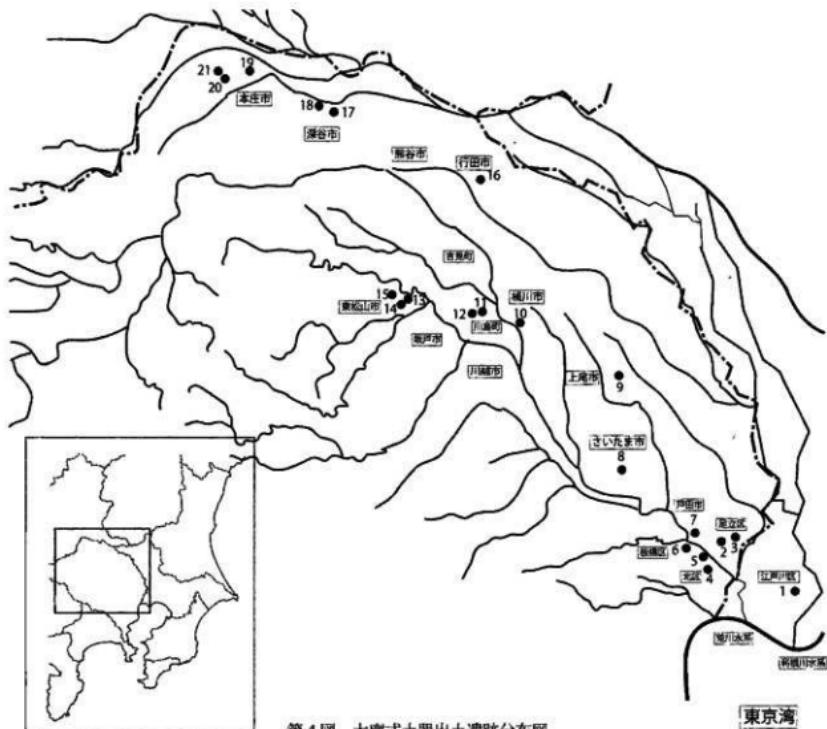
遺物は、土壤覆土から大型壺が1点出土した。口縁部の破片であるが、胎土の特徴から搬入品と考えられる。口縁端部を欠損しているが、外面に棒状浮文が認められる。下端部の粘土帯は、断面三角形となることから、大廟IV式(渡井1999)に属すると思われる。

### 3 伊興遺跡 (第5図3・4) (足立区1997)

伊興遺跡は、足立区伊興町に所在する。舎人遺跡と同じ毛長川右岸の自然堤防上に立地する。

遺物は、大型壺が2点確認できる。

3・4は、口縁部の破片である。3は井戸状の土壤から出土した。中期初頭の土器とともに、前



第4図 大廟式土器出土遺跡分布図

No.	遺跡名	河川	立地	遺構		器種				焼入	時期	備考	
				住居	墓	溝	土壙	他	大壺	壺	甕	高壺	他
1	上小岩	江戸川	自然堤防										
2	舍人	毛長川	自然堤防			○		○				○	IV
3	伊興	毛長川	自然堤防		○	○	○					○	IV 内面焼
4	中里	鴨田川	低地					○					
5	魏島馬場	鴨田川	自然堤防	○				○				○	IV
6	志村	荒川	台地	○	○	○		○			○		
7	鍛治谷・新田口	荒川	自然堤防		○			○				○	非掲載
8	別所	荒川	台地					○					焼成
9	三番耕地	荒川	台地					○				○	
10	宮前	荒川	台地					○				○	IかII
11	白井沼	荒川	自然堤防	○	○	○	○	○	○	○	○	○	IV 転用
12	富田後	荒川	自然堤防	○				○				○	整理中
13	御坊山29号墳	都幾川	台地	○				○				○	III
14	反町	都幾川	自然堤防		○			○				○	
15	三番町	都幾川	台地	○				○				○	III~IV 整理中
16	高畠	忍川	自然堤防			○	○	○				○	IV
17	上敷免	小山川	自然堤防		○			○					焼成 IV
18	森下	小山川	自然堤防	○				○				○	
19	後堀	女塚川	自然堤防	○						○			焼成
20	久下前A	女塚川	自然堤防		○			○				○	
21	川越田	女塚川	自然堤防					○					焼成 二次焼成

第1表 大廟式土器出土遺跡一覧

期の土器が多量に廃棄された状態で出土している。4は、内面のみ煤が付着している。(註2)

2点とも、胎土の特徴から、搬入品と考えられ、内面の突帯の断面が四角形で、また、口縁部外面下端部に断面三角形の粘土を貼付している。この特徴から、大廟IV式に相当すると思われる。

4 豊島馬場遺跡（第5図5～8）（小林他1995）  
豊島馬場遺跡は、北区豊島に所在する。

隅田川右岸の自然堤防上に立地する。

遺物は、周溝造構、包含層中から、大型壺、折り返し口縁となる中型の壺が出土した。

5は、内面の突帯が小さいが、口縁部の立ち上がりは高い。外面に棒状浮文が認められる。

6・7は搬入品と考えられる。6は、ラッパ状に開く複合口縁壺で、口縁端部に粘土帶を貼付している。7は、大型壺で、口縁部の破片である。

8は器形の特徴から、駿河系の可能性がある。

5 中里遺跡（第5図9）（東北新幹線1989）

中里遺跡は、北区上中里に所在する。武藏野台地の崖線直下で、隅田川が形成した低地に立地している。遺物は、大型壺1点が確認される。

溝跡から出土し、広範囲に破片となって出土した。報告書では、意図的な破碎を想定している。口径は41cmと大型で、胸部上半部まで残存している。頸部に刻み目のある突帯が巡り、本来の大廟壺にはない属性が認められる。

6 志村遺跡（第5図10・11）（秋山他2005・水澤他1999）

志村遺跡は板橋区志村一丁目に所在する。荒川に面する武藏野台地縁辺部の台地上に立地する。

遺物は、第5地点の堅穴住居跡から大型壺(10)、第6地点の方形周溝墓から、大型の台付壺(11)が出土した。11は、駿河系かどうかは明らかに出来ないが、胸部の最大径が40cm前後となる大型の壺と考えられる。大型壺は、駿河特有の器種であるため、類例に加えた。

7 錬治谷・新田口遺跡（写真4）（西口1986）

錬治谷・新田口遺跡は、埼玉県戸田市上戸田に所在する。遺跡は、荒川左岸の自然堤防上に立地する。報告書非掲載資料の小破片に、壺胴部の破片が数点含まれていた。溝跡から出土した。

8 別所遺跡（2次）（第6図12）（青木他1988）  
別所遺跡は、さいたま市（旧浦和市）に所在する。遺跡は、大宮台地浦和支台に立地する。

遺物は、壺の口縁部が1点確認される。住居跡から出土した。12は、壺であるが、大廟式の壺とは形状が全く異なる。しかし、口縁部内面に突帯を有することから、模倣品と考えられる。

9 三番耕地（第6図13）（埼玉事業団1985）

三番耕地遺跡は、上尾市原市に所在し、芝川と綾瀬川に挟まれた大宮台地上に立地する。遺物は、複合口縁の壺口縁部が1点出土した。堅穴住居跡から出土した。胎土に白色の軽石状の粒子を含む。搬入品と考えられる。

10 宮前遺跡（第6図14）（桶川市1991）

宮前遺跡は、桶川市川田谷に所在する。荒川を望む大宮台地上に立地し、遺跡に隣接して、畿内系の副葬品が出土した熊野神社古墳がある。

遺物は、大型壺の口縁部が堅穴住居跡から出土した。形態的には、折り返し口縁の上に複合部を乗せ、二重口縁としている。口縁内面の突帯もシャープで、断面が三角形となる古いタイプのもので、渡井英聰（渡井1999）によれば、大廟I式あるいはII式に属するという。しかし、大型壺と共に伴する遺物は、ナデ調整の甕や脚部が柱状となる高杯であり、出土した住居の時期は、五領式でも新しい段階に属すると考えられる。

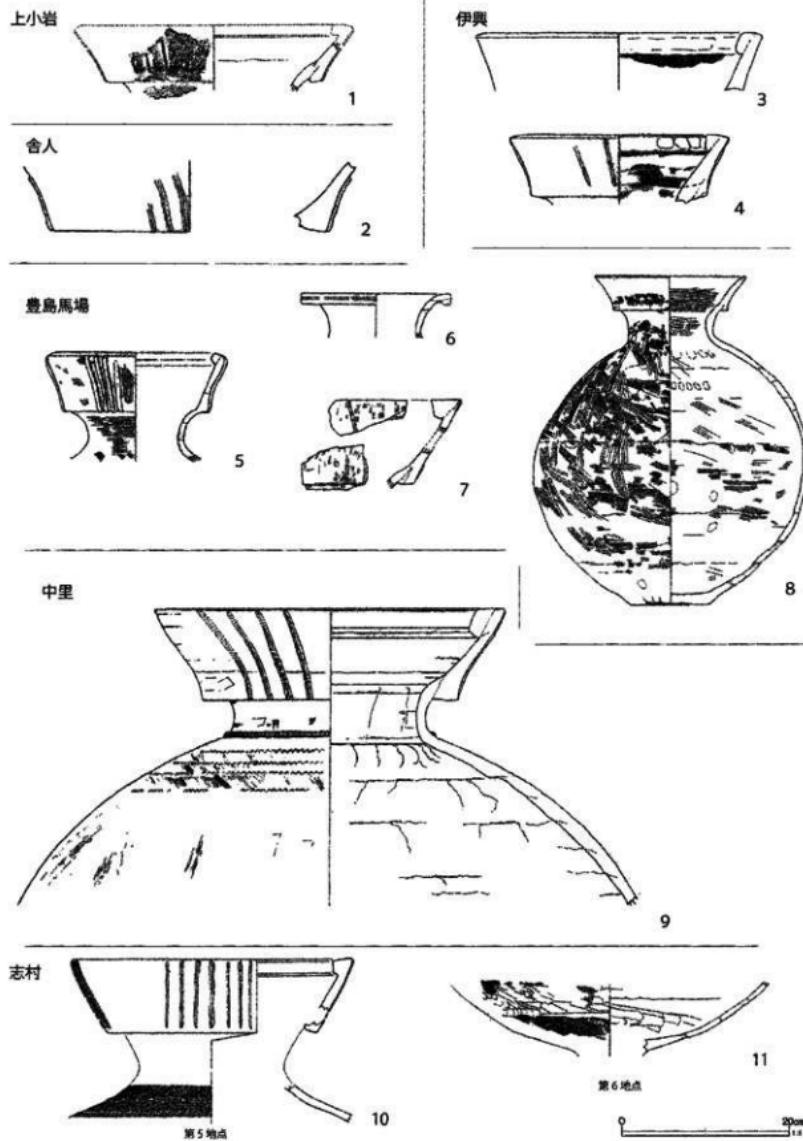
11 富田後遺跡

富田後遺跡は、比企郡川島町に所在する。荒川が形成した自然堤防上に立地する。

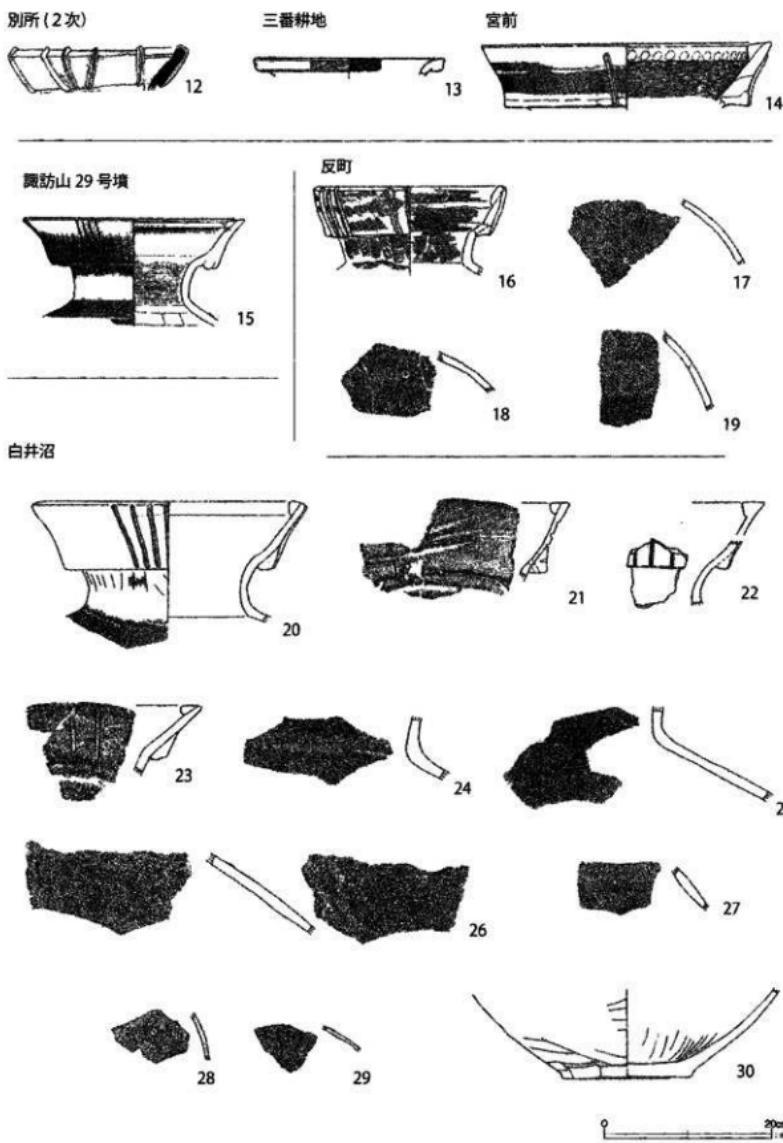
遺物は、大型壺の口縁部が出土した。胎土の特徴から、搬入品と考えられる。(註3)

12 白井沼遺跡（第6図20～30、第7図31～35）

（磯崎・中山2005、栗岡2007）

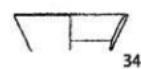
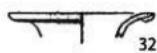
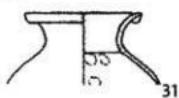


第5図 各地の大麻式土器（1）



第6図 各地の大麻式土器(2)

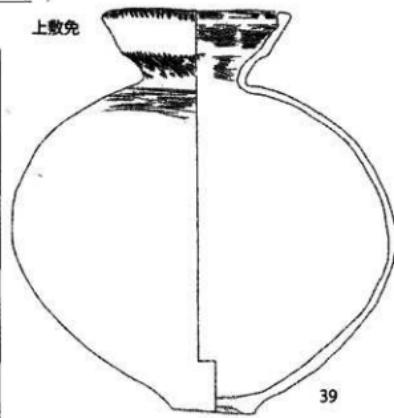
白井沼



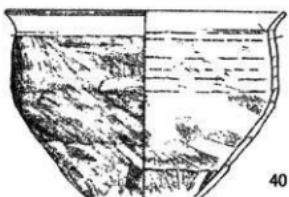
川越田



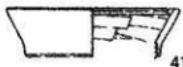
上敷免



後張



久下前A



第7図 各地の大斎式土器（3）

白井沼遺跡は、比企郡川島町に所在する。富田後遺跡とは近接している。遺跡は、荒川が形成した古い自然堤防上に立地する。

遺物は、大型壺、大型甕、複合（折り返し）口縁壺、高坏、鉢がある。大型壺以外は、大型壺と同じ胎土で製作されたもので、同一地域からの搬入品と考えられる。

大型壺は全体で15点確認された。完形土器はなく、口縁部7点、底部2点、胴部6点であった。今回図示したものは、このうち9点である（20～27、30）。

口縁部の特徴は、外反する単純口縁を作り出し、外面下端部に断面三角形の粘土帯を貼付し、口縁内面には、断面四角形の突帯が巡る。口縁部外面には、棒状浮文または沈線が施されている。

白井沼遺跡では、大型壺は複数個体出土し、口縁部のみではなく、胴部、底部も出土していることから、搬入時は、完形であったと考えられる。また、21は、口縁部に補修孔と思われるものが観察され、さらに、砥石に転用されたと考えられる傷も残されていた。このことから、搬入時の本来の目的とは別に、転用されたことを物語る資料となる。

口縁部の製作技法は、宮前遺跡の例とは異なり、口縁部が高く、内面の突帯も断面が四角くなるなど、新しい要素となっている。このことから、大甕IV式に相当すると考えられる。

複合口縁壺（28・29・31・32）は、全体で5点出土した。完形品はない。口縁部2点、胴部2点、底部1点である。

口縁部は水平近くまで外反し、端部に粘土帯を貼付している。大型壺と同じ胎土で製作されている。

高坏（33）は1点のみ出土した。口縁部と脚部を欠損しており、全体の器形は明らかでないが、橢形の器形となる、大型壺と同じ胎土で製作されている。

鉢（34）は、小破片で、器形の復元が困難である。

るが、小型丸底鉢であると考えられる。大型壺と同じ胎土で製作されている。

大型甕（35）は、1点のみ出土した。口径が40.2cmと、白井沼遺跡出土土器の中でも口径が最大となる。底部を欠損していたため、台付甕か平底甕が明らかに出来なかった。駿河を中心に相模湾、東京湾などの太平洋沿岸地域で多く出土し、内陸部での出土は、類例がない。

本遺跡と良く似た例が、静岡市川合遺跡（第3図9）で出土している。（静岡県1992）

#### 13 反町遺跡（第6図16～19）（福田・赤熊2009）

反町遺跡は、東松山市に所在する。都幾川が形成した自然堤防上に立地する。遺物は、大型壺、複合（折り返し）口縁壺が出土した。

16は、大型壺の模倣品と考えられる。胎土は在地の粘土である。口縁部内面に突帯を有するものの、頸部は短く、口縁部の立ち上がりは低い。

17～19は、中型の複合（折り返し）口縁壺の胴部片である。胎土の特徴から搬入品と考えられる。

4点とも、旧都幾川流路跡と考えられる河川跡から出土した。

#### 14 高坂三番町遺跡

東松山市に所在する。反町遺跡のある低地を望む台地上に立地する。

土壤から、完形に近い大型壺が出土している。壺棺として転用された可能性がある。口縁の特徴は、白井沼遺跡のものと同様で、大甕III～IV式に相当するものと考えられる。（註4）

#### 15 調訪山29号墳（第6図15）（埼玉県1986）

東松山市に所在する。都幾川右岸の台地上に立地し、反町、高坂三番町遺跡の上流域にある。調訪山29号墳は、全長68mの前方後方墳で、大型壺が一点出土した。

壺は、前方部周溝のブリッジ状の部分から出土した。口縁が完存し、伏せた状態で出土した。

口縁部内面の突帯は、断面が四角形で、口縁は低く、外面下端の粘土の貼付も、折り返し口縁を

作り出した後に粘土帯を付け足している。口縁部外面には、四本一組の沈線が5単位認められる。

肩部の文様は、結節のある無節の縄文で、円形浮文が貼付される。胎土に白色のバミスを多量に含んでおり、搬入品と考えられる。

白沼遺跡の大型壺と比較すると、口縁の内面の突帯は断面四角形であるが、口縁部が低く、下端部の成形も古い様相を有している。大席IV式に属すると考えられる。

#### 16 高畠遺跡（第7図36）（田部井他1977）

高畠遺跡は、行田市に所在する。忍川の形成した自然堤防上に立地する。遺物は、大型壺口縁部が1点、トレンチ調査で出土した。大型壺は、壺、甕、高环等が集中した地点から出土し、住居跡等の存在が考えられる。大型壺は、口径21cmとやや小ぶりな口縁部で、伊興遺跡（4）、豊島馬場遺跡（5）、久下前遺跡（41）に類例が認められる。口縁部内面の突帯は断面四角形で、外面に二本の棒状浮文が貼付される。

搬入品で、大席IV式に属すると考えられる。

#### 17 森下遺跡（第7図37）（知久2005）

森下遺跡は、深谷市に所在し、利根川流域の、小山川、福川に挟まれた自然堤防上に立地する。東側に隣接して、上敷免遺跡がある。遺物は、大型壺口縁部片が1点、住居跡から出土した。小片のため、復元が困難であるが、口縁部内面の突帯はシャープで、断面が三角形となる。胎土の特徴から、搬入品と考えられる（註5）。

#### 18 上敷免遺跡（第7図39）（瀧瀬1993）

上敷免遺跡は、深谷市に所在し、森下遺跡の東側に隣接する。遺物は、土壤から、大型壺の完形に復元できる個体が出土している。

口縁部内面に突帯があることを除けば、口縁外面上端と下端にヘラ状工具による刻み目、頸部が「く」の字状に屈曲し、底部が輪台状になるなど、本来の大席式大型壺には無い特徴である。胎土も在地のものであることから、模倣品と考えられ

る。遺物の時期の特定は難しいが、器形の特徴から、渡井の分類（渡井1999）の大型壺C類またはD類の模倣と考えられ、大席IV式もしくはそれ以降に位置付けられよう。

#### 19 久下前遺跡（第7図41）（恋河内他2010）

久下前遺跡は、本庄市に所在する。利根川支流の女堀川流域の自然堤防に立地する。

遺物は河川跡から、大型壺の口縁部片1点が、多量の土器とともに出土した。口縁部内面の突帯は小さく、古い特徴を有しているが、小破片のため、不明である。

#### 20 後張遺跡（第7図40）（立石1982）

後張遺跡は、本庄市に所在する。女堀川流域の自然堤防上に立地し、久下前遺跡より上流域にある。遺物は、竪穴住居跡から、大型甕が1点出土した。口径33cm程で、底部から鉢形に開き、胴部上位で直線的に立ち上がる。口縁部は短く屈曲しながら外傾する。

胎土は在地産だが、器形の特徴がこの地域の甕とは異なる。駿河系かどうかも明らかに出来なかつたが、類例の一つとして紹介する。

#### 21 川越田遺跡（第7図38）（児玉町1993）

川越田遺跡は、本庄市に所在する。女堀川流域の自然堤防上に立地する。遺物は、包含層から大型甕が1点出土した。口径38cmで、この地域には無い器形である。胎土に片岩を含んでおり、在地産であるが、良く似た器形の大甕が、静岡市川合遺跡（第3図10）で出土している。駿河系との関係は明らかに出来ないが、大型甕の類例として紹介する。

以上、荒川、利根川流域の大席式土器出土遺跡・土器について、見てきた。これら大席式土器の出土する遺跡、地域の特徴として、以下の点があげられる。

##### （1）分布

大席式土器の分布については、

##### 1 荒川・利根川下流域の東京低地と低地を望

## む武藏野台地上

- 2 大宮台地
- 3 荒川中流域の東松山・川島を中心とした低地および低地を望む台地上
- 4 群馬県境に近い、本庄・児玉の低地
- 5 行田～深谷にわたる、利根川、荒川に挟まれた低地帯

分布域は、弥生時代後期から続く台地上の遺跡と、それまで弥生後期段階には遺跡の分布が認められない眼下の低地や、河川流域の自然堤防上の遺跡から出土している。

### (2) 出土遺構

大甕式土器が出土する遺構は、住居、溝跡、土壙等の居住域からの出土が多い。完形土器は少なく、口縁部、胴部、底部等の破片となって出土している。他の在地の壺・甕・高环等とともに、廃棄または遺棄されたものが多く、必ずしも、出土状況に際立った特殊性は見いだせない。

### (3) 出土器種

出土器種は、大型壺が圧倒的に多いが、白井沼遺跡例のように、複数器種、個体が出土する遺跡がある。白井沼遺跡では、大型甕を除いて、他の器種すべてが同じ胎土で製作されていた。このことは、大型壺を含め、他の器種も同一地域で製作され、持ち込まれたものと考えるのが自然である。大型壺には、底部や胴部片も出土していることから、搬入時は、完形であったものと思われる。

また、大型壺の破片資料の中には、口縁部内面に煤が付着したもの、二次焼成を受けたもの、補修孔と思われる二次加工や、砥石に転用したものと思われる傷等の痕跡が認められるものがある。壺本来の目的とは異なる使用目的に転用された可能性も認められる。

### (4) 時期

遺物の搬入時期は、大型壺の特徴から桶川市宮前遺跡の例（大甕II式か）を除けば、大甕III式～IV式と考えられる。諏訪山29号墳の例を除けば

大甕IV式に属するものと考えられる。

大甕IV式は、埼玉県内において、古墳時代前期の編年が混沌としているものの、並行関係を求めるならば、日本考古学協会新潟大会（新潟シンポ）で提示された編年案（日本考古学協会1993）の8～9期に属すると考えられる。

時期的には、一部古相を示すものもあるが、ほとんどが古墳時代前期でも後半段階で荒川流域にもたらされる。

## 4まとめ

### (1) 大甕式土器の故地について

これまで、荒川・利根川流域の大甕式土器について見てきた。大甕式は、前述したように、駿河湾を囲む地域の土器型式である。では、駿河のどの地域から、運ばれたものなのか。

各地で出土する大型壺は、他の土器と容易に区別できるほど特徴的な胎土であることは既に述べた。

大甕式土器は、搬入品は、大型甕以外は全て同じ粘土で製作されていた。同じ胎土であるということは、同一地域で製作されたものであろう。

S字状口縁台付甕で見られる、特殊な砂粒や雲母を混入させるように、大型壺のみ特定の粘土を選択し製作されたということも考えられる。

しかし、白井沼遺跡での例は、他の器種も同じ粘土で製作されていた。このことは、大型壺のみでなく、他の器種も同じように普通に製作し、生活に供していた地域があることを物語っている。

この白色軽石状粒子は、伊豆天城山から繩文時代後期～晩期に噴火したカワゴ平バミスと呼ばれ、伊豆半島の天城を中心に、狩野川流域の古墳時代前期の土器に使用されている。駿河というよりは、伊豆の土器と呼んだほうがよいのかもしれない。

しかしながら、狩野川流域では、生産地を伺わせるような大型壺や他の土器が多量に出土する遺

跡は分布していない。

大廓式土器の本拠地と考えられる、狩野川以西の富士・富士宮・沼津市周辺の粘土とも異なり、大型壺が多量に出土する遺跡は見つかっていない。したがって、これまで知られていない場所に、その産地が存在する可能性がある。

一方、駿河西部の静清平野では、川合遺跡（静岡県1992）、小県遺跡（註6）において、大型壺・大型甕が多く出土している。特に川合遺跡では、弥生後期の内面に突帯のない大型壺の段階から古墳時代前期を通して連続的に出土している。

また、川合遺跡では、焼成温度または使用粘土に問題があるのか、表面が発泡・変形し、使用されずに廃棄された土器も出土している。このため川合遺跡は、駿河西部における土器の製作地、あるいは生産地に近い遺跡の可能性がある。（註7）

しかし川合遺跡出土土器の中で大型壺は、特殊な粘土ではなく、他の土器と同じ静清平野の粘土で製作されていた。

巻頭写真及び、第3図11～13は、川合遺跡出土の大廓Ⅲ期～Ⅳ期に属すると思われる大型壺である。それぞれ色調は異なるが、これらの土器に白色軽石状粒子は含まれていなかった。埼玉県内で出土する搬入品の大型壺、複合口縁壺、高杯等とは明らかに異なる胎土で製作されていた（註8）。

川合遺跡は、駿河での一方の産地の可能性はあるが、各地で出土する大廓式土器の故地ではない。

やはり、白色軽石状粒子を多量に含む、狩野川流域からもたらされたと考えるのが妥当であろう。また、先に触れたが、複数器種、個体が出土した白井沼遺跡は、大型壺を除く全ての器種が、同じ胎土で製作されていた。このことは、同一地域で製作されたものがセットで移動してきたことを物語る資料となる。そして、これまで、大型壺、複合口縁壺、大型甕がそれぞれ単体で動くとされていた事に、疑問を投げかける材料となる。セッ

トでの移動は、人の移住を含めた移動を考慮する必要がある。

## （2）大型壺の用途について

発掘調査で検出される遺物の出土状態は、遺物の使用の最後の形態を表している。

大廓式土器、特に大型壺は、竪穴住居跡などの居住にかかる遺構から、他の遺物とともに破片となって出土する例が多い。このことは、他の遺物と同様に生活に伴う使用のうち、廃棄されたものと考えられる。

壺は、本来貯蔵容器として使用されるものである。大型壺も、本来、貯蔵容器として、他の土器とともに、搬入されたと考えられる。

搬入後、破損したものは補修され、使い続けられる。補修孔と思われる破片（第6図21）の存在からもそのことは考えられる。

補修してもなお、壊れたものは、底部は鉢として、口縁部は器台や炉材（岩本2000）として、破片は第6図21のように砥石等に転用されていたものと思われる。壺棺として利用される例も、壺棺として搬入されたのではなく、棺に転用されたものと考えるべきである。

大型壺本来の用途に立ち返ってみれば、それらは、貯蔵容器であり、種類等の内容物とともにもたらされ、特に白井沼遺跡例のように、他の土器も携えての移動（移住）という可能性も視野に入れるべきであろう。

仮に種類貯蔵用とすれば、集落内において、水田の經營単位ごとに保管されればよいわけで、多量の大型壺は必要ない。出土遺構も、集落内の遺構から出土することも頗る。

今回は、何故移動するのかについては、検討できなかつたが、これには、出土する遺構の性格も検討しなければならない。

荒川流域における、大廓式土器を出土する低地遺跡での居住形態は、周溝持平地式建物が採用され、これらが静清平野の低地遺跡の建物跡との

類似性を指摘する福田聖の興味深い見解（福田2009）がある。低地の開発に関して、駿河の人々が関与し、その際に持ち込まれたものという解釈を遺構の面から伺わせるもので、注目される。

ただし、先に見てきたように、遺構の類似性が注目される静清平野の土器は、関東で出土する大廓式土器とは、肉眼的には明らかに異なる粘土で製作されていた。また、狩野川流域の遺跡は竪穴住居跡が主体で、遺構の様相が異なることも事実であり、遺構の共通性を論じるにはさらに検討が必要となろう。今後、低地遺跡では、大型壺と、他の器種がセットで出土する遺跡も増加すると考えられる。大廓式土器のうち、大型壺搬入の目的については、大型壺単体の移動ではなく、他の器種とともに移動してきたことを考慮に入れる必要がある。大型壺と共に移動したと考えられる複合口縁壺、白井沼遺跡で1点のみ確認できた楔状の高坏、今回は検討しなかったが、駿河に搬入され、独自に変容し、定着し、拡散していくS字状口縁台付壺等の検討が必要となろう。

そしてさらに、大型壺とは全く異なる粘土で製作された大型甕については、他の器種とは異なる動きをしていた可能性もあり、今後の課題として残った。本来駿河では大廓式土器を構成するそれぞれの器種が、同時に動くのか、個別に動くのかを見極める必要があろう。

#### おわりに

今回は、これまで注目されてこなかった、大廓式土器の荒川、利根川流域の類例調査が主な目的であったため、詳細な検討を行わなかった。

大廓式土器を冠する駿河東部地域と、駿河西部地域では、土器の様相は異なっている。しかし、静岡市川合遺跡のように、東部の出土量を凌駕するような大型壺出土の在り方は特異である。各地で出土する大廓式の移動の意義を理解するには、土器の胎土の情報を持ち、本拠地である駿河そのものの様相の把握が急務であろう。

#### 謝辞

本稿を草するにあたり、資料の実見、類例の調査等では以下の方々にご指導・ご助言頂いた。末筆ながら、感謝申し上げます。

岩本 貴、牛山英昭、江原昌俊、越川欣和、関口 満、関根 訪、知久裕昭、福田 聖、的野善行、丸杉俊一郎、宮島秀夫、渡井英吾（敬称略）

註1 周溝遺構は、福山聖の周溝持建物跡の研究によるところが大きい。白井沼遺跡においては、方形周溝墓状の遺構を、出土遺物、遺構の形状、分布状況から、居住に関わる遺構と判断し、周溝遺構と呼称した（栗岡2007）

註2 伊興遺跡の資料については、実見できなかつたが、足立区教育委員会越川氏のご厚意で、写真を拝見した。

註3 富田後遺跡は、平成22年度現在、埼玉県埋蔵文化財事業団で整理作業中である。

註4 高坂三番町遺跡は、東松山市教育委員会が現在整理中である。2007年に同教育委員会のご厚意により、実見した。

註5 深谷市教育委員会知久裕昭氏のご厚意により実見した。

註6 渡井英吾氏の御教示による。報告書未刊行

註7 新井正樹氏の発泡変形土器についての集成（新井2003）によれば、発泡変形は、海成粘土に起因する可能性が指摘されている。筆者は、川合遺跡の変形土器を実見したが、その表面は、輪羽口先端部のように還元、発泡しているもの、焼成が良好な軟質の須恵器のような風合いのもの、そして、使用に耐えられない程歪み、破裂したのち、廃棄されたと思われるものが認められた。歪んだ土器は、さながら須恵器の灰原出土遺物を想定させ、土器の生産地そのもの、もしくは近傍であると判断した。

註8 静岡県教育委員会のご厚意で実見させていただいた。

## 引用・参考文献

- 青木義裕・岩井重雄・山田尚友 1988『別所遺跡発掘調査報告書（第2次）』浦和市遺跡調査会報告書第94集  
秋山道生・村田厚仁 2005『志村遺跡第5地点』志村遺跡調査会  
足立区伊興遺跡調査会1997『伊興遺跡』  
新井正樹 2003『発砲変形七器小考』『静岡県考古学研究35』静岡県考古学会  
磯崎一・中山浩彦 2005『白井沼遺跡I』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第315集  
岩本 貴 2000『大廐式大型壺の転用』『研究紀要』第7号 静岡県埋蔵文化財調査研究所  
桶川市教育委員会 1991『桶川市遺跡発掘調査報告書（宮前遺跡）』  
上小岩遺跡調査会 1988『上小岩遺跡I』  
上小岩遺跡調査会 1990『上小岩遺跡II』  
栗岡潤 2007『白井沼遺跡II』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第328集  
恋河内昭彦・の野善行2010『北掘久下塚北遺跡II・久下東遺跡IV・久下前遺跡II』本庄市埋蔵文化財報告書第19集  
児玉町遺跡調査会 1993『川越田II』児玉町遺跡調査会報告書第5集  
小林三郎・中島広顧・小林 高・小林理恵 1995『豊島馬場遺跡』北区埋蔵文化財調査報告書第16集  
埼玉県史編さん室 1986『2賀訪山29号墳』埼玉県古式古墳調査報告書  
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1985『三番耕地・十八番耕地・十二番耕地・神山』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第43集  
静岡県埋蔵文化財調査研究所 1992『川合遺跡』遺物編I 静岡県埋蔵文化財調査研究所報告第41集  
静岡県埋蔵文化財調査研究所 1997『北神馬土手遺跡 他』II 静岡県埋蔵文化財調査研究所報告 第89集  
瀧原芳之 1993『上敷免遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第128集  
立石盛蔵 1982『後張』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第15集  
田部井功・金子真士 1977『鴻池・武良内・高烟』埼玉県遺跡発掘調査報告書第11集  
知久裕昭 2005『森下遺跡（第2次）』埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第103集  
東北新幹線中里遺跡調査会 1989『中里遺跡5』  
永峯光一他 2006『舍人遺跡III』足立区教育委員会  
西口正純 1986『鎌治谷・新田口遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第62集  
沼津市教育委員会 1978『藤井原遺跡発掘調査報告書I』遺構編  
沼津市教育委員会 2003『市道0230号線関連遺跡』1、植出遺跡  
福田型・赤熊浩一 2009『反町遺跡I』埼玉県遺跡発掘調査報告書第361集  
福田型 2009『低地遺跡から見た関東地方における古墳時代の開始』『研究紀要』24号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
三島市教育委員会 1989『安久遺跡』  
三島市教育委員会 2000『夏海木遺跡群』源平山遺跡  
水澤裕子・山田直美・村田厚仁 1999『志村遺跡第6地点発掘調査報告書』凸版印刷工場内遺跡調査会  
渡井英誓 1998『大廐式土器小考一大廐式土器の画期とその展開ー』『庄内式土器研究』XVI  
渡井英誓・竹内順一 1999『大廐式と呼ばれる大型壺』『静岡県考古学研究31』  
渡井英誓 2008『潤井川流域における古墳時代前期の高环一大廐式の高环を考えるー』『静岡県考古学研究40』

設立30周年記念

**研究紀要 第25号**

2011

平成23年3月14日 印刷

平成23年3月24日 発行

発行 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 熊谷市船木台四丁目4番地1

<http://www.saimabun.or.jp>

電話 0493-39-3955

印刷 株式会社文化新聞社